《　歴史&宗教　No012　》

石造文化財から学ぶこと

石造物に秘められた背景を探る記述である。全国各地の田舎（地方）から大都会までの路傍に佇む、あるいは寺社境内に見られる石造物（石碑・石塔・野仏、無縁墓石等）は庶民の信仰の記念碑、かつ、祈念碑である。それ故に石造物は単なる石ころではなく、建立に至った人々の諸々の思い（過程）が詰まった、信仰対象の魂（霊魂）が宿っている神社（神様）・仏閣（仏様）を縮図化しているのである、まさに庶民の文化遺産である。それらの殆どには文字を彫刻し、建立に至った経緯の情報を発信している、時代や社会の様子を物語る、宗教（信仰）心の深さが表れる、当時の技術水準や職人の技量を知ることができる。社会のコミュニティ（共同体結集力）や人の営みの可視化を図っているものである。

例えば、記念碑の切り口では、信仰という思いの実践・実行の証拠・記録・開示である。本人の全額出費で、あるいは、講中や代参で目的地に行って来たことの参拝記念である。また、祈念碑の意味合いは、目的地に行くに行けない人達の行って見たいという願望を適えるものとなる。各地に無数にある写し霊場の存在に通底するものがあり、日常の身近な所で本場霊場と同等の御利益を授かりたい、本場の神通力加護を(※)間接的に賜りたいという人間欲望（懇願）の表象化の一面でもある。　（※）分霊・分社、勧請という意味合いを含むならば「直接的」となる。

これらに対面した時、次のような問題意識が湧く。

①造立の目的はどんなことだったのか？　②運搬手段を考えて移動を指揮した人がいたはずだが誰だったのか？　③大きな石を探し回ったのは誰なのか？　④原石はどこにあったのか？　⑤一つの石だったのか、どのように割ったのか？　⑥大きさ・重さは？　⑦どのようにして運んだのか、つまり、運搬経路（ルート）と運搬方法は？　⑧建立年は何時(いつ)か？　⑨運搬や設置に何人位関わったのか？　⑩どんな仕掛けで設置したのか？　⑪刻字（碑銘文、彫刻図柄）の内容は何を物語るのか？　⑫石工や土工の責任者（現場指揮官）は誰だったのか？　⑬所要資金、建設資金は誰が出したのか（今様のスポンサーは）？　⑭建立後に竣工式・除幕式等の式事を行ったのか否か？　⑮開眼供養などの入魂儀式（芯入れ）を挙行したはずだか、誰が導師となったのか？　⑯昭和 39(1964)年の新潟地震や平成 23(2011)年 3 月 11 日の東日本大震災でも倒壊しなかった理由は？　など興味、疑問は消えない。

当時の地区住民の思いや習俗を垣間見る事が出来て、土着の「神(かみ)・仏(ほとけ)」に対する篤い信仰の足跡が読み取れる。

さて、石碑・石塔には願主あるいは施主の文字が必ずといっていいほど刻まれている。その役割分担、定義とは何なのかについてである。

願主とは、発願主のことであり、当該事業の意義・意思を立てる、建立の目的や趣旨・趣意の発願文を起草する主導者を指す。自らの菩提を願った施与という意味も含まれている。私は、その事業の立案・総合企画を担った総合プロデューサー、あるいは全体統括者、つまり、全体・総体の取り纏め役を指したものだと解釈している。

他方、施主とは、元々は梵語（仏教語）であり、僧団に金品を施し、僧団の維持に関与する人を称した、つまり、寺院に寄付をして維持する者を称したという。前記発願主の事業に係る意図・意向を汲んで賛同す

る意思表示として、寄付金・奉加金等の資金提供者をいう、あるいは寄付金集めの勧進活動（募金）活動を担ったものだと解釈している。

願主が施主を兼ね、反対に施主が願主を兼ねている場合もあったろう。もちろん両者の協働（共同）もあったのだろう。個別の物を見ると、どちらか片方だけを刻した場合や、まったく刻されていないものが多々ある。

文字を彫刻した石工にも注目するが、彫刻されているのは本の一部である。　なお、村山民俗学会員の市村幸夫さんによると、本願主・脇願主・世話人・後見人・立会人・施主・寄付人・助力人・講中・行者など様々な名称が出て来る、とのことである。

次に、木村博・加藤和徳・市村幸夫著「信州石工　出羽路旅稼ぎ記（青娥書房発売）」の内容から図―1を紹介する、沢山の人達が協力していることが読み取れる、必ずしも信者、氏子とはき限らない多くの人達が助力したのだろう。

(七)　山形石工と石材

山形城石垣をはじめ石材は、馬見ヶ崎川から採取できる安山岩であった。馬見ヶ崎川は今でこそ山形市の北部に位置するが、かつて慶長年までは市内のほぼ中心部を流れていた。暴れ川であったし、大雨が降れば幾らでも大石が流れてきたであろう。馬見ヶ崎川に沿って石工が定着したであろうことは容易に想像がつく。しかし石工にとって都合がよくても度重なる洪水は、町場の人にとっては悩みの種であった。元和八年（一六二二）入部した鳥居忠政はこの暴れ川を大きく北に迂回させた。

馬見ヶ崎川の上流、山形市の東部に新山（にいやま）という集落がある。この地から石鳥居に適する大石が

165

産出された。

鳥海月山両所宮、印役神明神社、千手堂観音堂の石鳥居がそれである。「石鳥居建立　明和九

大正13年　新山地内にて　會田庄一氏提供

166

図－1

明治以降の国土開発や昭和の高度成長激動期の大規模事業（土地区画整理、道路の新設・改良・拡幅事業

等）でも廃棄されずに、継承し維持して来た、大事に守って来た事の素晴らしさが現れている、国土開発や風雪に耐えて今日に残っていることはまことに嬉しく思う。一つの地域の文化・歴史を凝縮した精神文化のランドマークと理解出来る。今の私達は、たかが「石（ころ）」と放置するのではなく、石に秘められた背景事情を想像しながら歴史を解凍し展開して行く楽しみの視点を持ちたいと思っている。石造文化財は地域の歴史教育の生きた素材である、また、大人の生涯学習の生きた素材である。

＜end＞